

禪宗より見たる佛身觀

鎌 田 禪 商

序 論

佛身觀の問題は佛入滅に始まる。佛陀釋尊の常住を信じてゐた佛弟子等は其の入滅を見て「世間眼滅」失於慈父」の悲嘆にくれ、茲に新しく「佛とは何ぞや」「佛陀は肉身を有するか否か」「肉身の滅すると共に佛陀も亦滅するか」「佛陀これ常住なりとすれば人間釋迦は應現の化身にして眞佛陀に非ざるか」等の根本問題に到達した。是れ佛身觀發展の出發點である。佛陀は其の入滅に際し次の如く遺訓されてゐる。

何用我此身、妙法身長存（藏七・七十二左） 此法常無盡（同）

則是如來法身常在而不滅也（辰十・百十四左） 我所說諸法 則是汝等師（辰十・二十三左）

如來告阿難言、汝勿見我入般涅槃便謂正法於此永絕、何以故、我昔爲諸比丘、制戒波羅提木叉、及餘所說種種妙法、此卽便是汝等大師、如我在世、無有異也（辰十・三十二左）

汝等比丘、於我滅後當尊重珍敬波羅提木叉、如闇遇明貪人得寶、當知此則是汝大師、若我住世無異此也（辰十・百十三左）

吾般涅槃後 汝等當恭敬 波羅提木叉 卽是汝大師（藏七・七十四）
斯の如く佛陀の本質たる法は常住、此意味に於て我在世と異なるなく、波羅提木叉が汝等の大師であるとの遺訓は後世の法身思想の基礎をなすものと思はれる。

後世發達せる佛身觀は種々なる立場から見られてゐるが、華嚴一乘教義分齊章（陽二・六十九右）には、小・始・終・頓・圓の教判的分類に従ふ數開合が説かれ、大乘義章卷十九（續藏經第二編第二套第三冊二百十一—二百十二）には六身・七身・八身の成立根據が説かれ、華嚴玄談卷三（續藏經第八套第三冊三百七右）には九身說成立の根據が説かれてゐるが、六・七・八・九の各身說の經證は筆者淺學にして其の有無を確定し得なかつたことを遺憾とする。

本論上 教内より見たる佛身觀

一 佛滅後に於ける直弟子の佛身觀

宗教一般が教祖の人格より開展すると共に、夫の持續發展の中心となるものは本尊に對する觀念

の發達如何にある。此意味に於て佛身觀發展の第一段階たる直弟子の佛身觀を知ることが最重要の事と思はれる。今其の二三を見るに次の如きものがある。

迦葉報言、汝勿歸我、如我所歸無上尊者、汝當歸依、婆羅門言、不審所歸無上尊者、今爲所在、迦葉報言、今我師世尊滅度未久、婆羅門言、世尊若在不避遠近、其當親見歸依禮拜、今聞迦葉言、如來滅度、今卽歸依滅度如來及法衆僧（長九・三十九右）

我聞如是、一時佛般涅槃後不久、……尊者阿難告曰、梵志、汝莫自歸於我、如我自歸於佛、汝亦應自歸（長七・九十六左）

爾時闍陀比丘見法得法知法起法、超越狐疑、不由於他、於大師教法、得無所畏、恭敬合掌白尊者阿難言、……不復見我、唯見正法（辰二・五十四左）

我聞如是、一時佛般涅槃後不久、……尊者阿難答曰、雨勢、我等不依於人而依於法、若有比丘知法者、我等請彼比丘爲我等說法、若彼衆清淨者、我等一切歡喜奉行彼比丘所說（長六・七十七右）

迦葉、阿難の如き大弟子達は佛入滅に惑はされず佛説の眞意を如實に把握し、法の中に理想的佛陀を見てゐたことが判かる。

二 小乘的佛身觀

原始佛教と開發佛教との過渡期の佛身觀として小乘教の夫れを見るに、其著しき特質として煩惱未斷說、三十四心斷結成道說、十八不共法、釋迦一佛說の四を擧げることが出来る。

(1)煩惱未斷說。釋尊を未だ凡夫の域を脱せず煩惱を伏斷せるに過ぎずと見るものにして、一般人類と佛陀との中間に在るものとなすのである。異部宗輪論には次の如く説かれてある。

不得解脫應言菩薩、猶是異生、諸結未斷若未已入正性離生、於異生地未名超越（藏四・七十七左）

(2)三十四心斷結成道說。是れ菩薩の歷劫成道を説けるものにして菩薩は先づ三阿僧祇劫に諸波羅蜜即ち菩薩の資糧を修し、次に百劫に相好業を修し更に王宮に下生出家し有漏智を以て下八地の見修二惑を斷じ、然る後に八忍八智の十六心を起して非想地の見惑を斷じ、更に九無間九解脫の十八心を起して非想地の修惑を斷じ始めて佛と成るとなすものにして、此の十六心と十八心を合して三十四心といふ。阿毘達磨俱舍論第五には

傳説、菩薩三十四念得菩提故、諦現觀中有十六念、離有頂貪有十八念、謂斷有頂九品煩惱起、九無間九解脫道、如是十八足前十六成三十四、一切菩薩決定先於無所有處、已得離貪方入見道、不復須斷下地煩惱、於此中間無容得起不同類心、故諸菩薩學位不應起滅盡定（收九・百十五）

とある。四諦の理を觀するに當つて起す二無漏心を八忍八智とする。忍は惑得と對して斷惑する作用であり、惑得に隔礙されざる故に無道と名づけ、智は滅理を證する作用にして惑得を解脫する故

に解脱道と名づけられる。欲界の四諦に四忍四智を數へることが出來、色無色兩界の四諦にも四忍四智を數へることが出來る。前十五心は見道に第十六心は修道に攝せられる。佛位到達に就いて釋尊の知的作用上に三十四心の連續ありとするものにして阿毘達磨大毘婆沙論第一百五十三、收七・十右にも同様の記事がある。

(3)十八不共法。果位の佛身觀として十八の佛德を擧げしものにして十力・四無所畏・大悲・三念處をいふ。不共とは如來の功德他と同じからざるをいふ。俱舍論第二十七(收十・九十五)に由つて略述しよう。(一)處非處智力。一切法自性功能の理これ有なるを知るを處智といひ、これ有に非ざるを知るを非處智といふ。無因論を遮止せんが爲に處の名を得、惡因論を遮止せんが爲に非處の名を得。(二)業異熟智力。是の如き類果は自己所造の業力の結果にして妻子等の與奪し得ざる所、是の如き類業は必ず自果を招くものであるといふ如く、諸の異熟果を感じ而も罣礙なき智力にして又これを自業智力ともいふ。(三)靜慮等智力。如實に諸の靜慮等の自性名を知り方便攝持味淨無漏順退住進決擇分等を得て罣礙なき智をいふ。(四)根上下智力。諸の有情の勝德に達し機根の差別を知る自由智をいふ。(五)種種勝解智力。諸の有情の類の勝劣如何に應じ其意樂の差別を知る自由智をいふ。(六)種種界智力。諸の有情の類の前際無始なる數習所成の志性、隨眠及び諸法性の種々差別を知る自由智をいふ。以上の六方は何れも有爲を對象とする故に十智中唯九智を攝する。(七)遍趣行

智力。佛よく生死に赴き涅槃に趣く。生死に於ては地獄に趣くあり天趣に赴くあり、涅槃に於ては三乗の別趣ある等、生死の因果と盡道を知る自由智をいふ。(八)宿住隨念智力。自他の過去宿住の差別を知る自由智をいふ。(九)死生智力。有情の類の未來世に於ける諸有の續生を知る自由智をいふ。(十)漏盡智力。所化の有情を知り漏盡方便を兼ねる自由智をいふ。

四無所畏とは(一)正等覺無畏、(二)漏永盡無畏、(三)說障法無畏、(四)說出道無畏である。無畏は智を其の因性とする故に法懼がない。(一)は佛の自智圓德を、(二)は其の自斷圓德を顯はし共に佛の自利圓滿を顯はす。(三)は諸弟子の邪道に行くを遮り、(四)は諸弟子をして正道に趣かしむる爲にして共に佛の利他圓滿を顯はす。

大悲は有情一般を對象とする故に俗智を本質とする。大は無癡を性とし悲は無瞋を性とする。

三念處とは(一)弟子の一向に恭敬するも歡喜を生せず、(二)弟子の恭敬せざるも憂感を生せず、(三)弟子の或は恭敬なるあり或は恭敬ならざるあるも共に歡感を生せざる如き正念正知に安住する念力をいふ。以上の如き佛德を十八不共法といふ。

(4)釋迦一佛說。小乘的佛身觀は多佛の存在を説かない。大智度論第九(往一・六十)に過現未に於ける無量の佛を要請し、釋迦一佛にては到底無盡の衆生を救濟すること能はずと論せる如きは小乘的釋迦一佛說に對する駁論と見做すことが出來やう。

三 大衆部の佛身觀

茲に始めて一佛多身説を見ることが出来る。異部宗輪論（藏四・七十六左）に據つて略述しやう。諸佛世尊は無漏身にして不可毀壞、漏に相應せず縛せられず三業は無漏、自らの名句聲等の教法を法輪として無知惑を摧伏し、以一音説一切法故に「令諸聞者皆別領解解細義」が可能となる。其の所説は虚言なく道理に稱ひ、多劫を経て修得したる報身の圓極法界は無邊際、所見の丈六は實佛身ではなく隨機の化身に過ぎぬ。所宜に隨ひ大小身を現する故に量無邊、よく多身を現じ、數不定の故に數無邊、佛身諸法皆無量の善根を因となす故に因無邊である。其の神通力は作意せずして一刹那中に十方世界に遍く、有情界不盡の故に佛壽命も亦無窮、厭足心なき故に衆生教化に精進し不入涅槃（常住）である。欲求なく定心ある故に睡夢なく、所説は思惟方便を待たずして任運、聽法者は之を聞き佛思惟に依る故に説を爲すと歡喜する。能く一切法の差別自性を了證し智慧よく諸法を解盡す。現苦滅を觀る盡智あり未來苦不生を觀る無生智あり共に報身（慈恩は大衆部の實身を報身の意に解してゐる）の二用にして間斷なしと説かれてある。斯く大乘的佛身觀との著しき親近性を有する。此の發展として智度論所説の佛身觀が導出されたと思はれる。

四 一 佛二身説

(1) 法身と生身。大智度論(往一・五十八。往二・五十一右。往二・七十九右。往五・七十右。往一・五十八左。往二・四十八右)佛地經論(曇十一・四十四)華嚴一乘教義分齋章(陽二・六十三左)大般涅槃經(盈六・六十六)等の所説がこれである。無相の理を法身とするあり(往二・四十八)、報身を法身とするあり(往二・七十九)、化身を法身とするあり(同)、自性身と自受用身とを法身とするあり(曇十一)、又戒定慧等の五分を法身とし、(陽二・六十三左)、常樂我淨を法身とする等がある(盈六・六十六)。生身は人趣の佛陀たる方便身にして生身といふも化身といふも何れも化作の點に名づけたるものにして見方の相違に依る異名に過ぎぬ(智度論)と考へられ、或は他受用身と變化身とを合したものとされ(曇十一・四十四)、歷劫成道の釋迦佛ともいはれ(陽二・六十三左)、方便應化の有爲身なりともいはれてゐる。(盈六・六十六)

(2) 法身と解脱身。成唯識論(往十・四十七)解深密經(黃八・六十二左)の所説にして、生死と縛法とを解脱するも未だ所知障を斷せず無量の功德依を得ず、十力等の殊勝法の莊嚴を得ざるを解脱身といひ、離言離過の法を成就し一切法の性相不二を成じたる大覺世尊を法身といふ。此所謂法身は三身中の法身ではなく所知障を離れたる解脱身の謂である。故に解脱身たるに於ては聲聞・獨覺と如來とは同等である。共に自受用的佛徳に名づけしもので他受用的要素を含まぬことを特質とする。

(3) 二法身說。菩薩瓔珞本業經所說の果極法身・應化法身(列一・二〇)、究竟一乘實性論所說の寂靜法界身・得彼因身(曇二・二〇八)、往生論註所說の法性法身・方便法身(續藏經第七十一套第二冊百二十九等)、果極法身は常住にして生滅を離れたる體、夫の用だる應化法身は「如影隨形」に同じく常住なるもの。寂靜法界身は如來法身の無分別智の自内證に名づけ、習氣に依り衆生教化に作用する說法身を得彼因身と名づける。法性法身は寂滅無爲、實相無相なる法性其者をいひ、三界衆生の虛妄の相を知つて眞實の慈悲を生ずる。一切功德を一切衆生に施し智慧の火を以て衆生煩惱の草木を焼き、衆生成佛せずんば我れ佛とならずとの大誓願を生じ、以て衆生救済に精進する法性法身の用が即ち方便法身である。斯く二法身といふも實は自受用身と他受用身とを意味する。一佛三身說を二身と見たものと思はれる。

五 一佛三身說

(1) 法・報・應の三身說。唯心的見地より新解釋を下せるものに大乘起信論(衆十・三六一・三九)の所說がある。能く染淨の法を任持し諸法の種子を有して諸法の因となり、普遍的に平等にして智慧覺知を有し清淨にして常樂我淨、不變自在にして生滅遷らざる眞如の平等を法身と名づける。法身の用として不思議業即ち報身と種々の用即ち行用としての應身とを生ずる。行用は眞如と等しく一切處

に遍く衆生の見聞に従つて其用を現する。用には分別事識に依るものと業識に依るものとがある。即ち第六識を眞信する凡夫二乗の所見が應身、第七識を眞信する地前・究竟地の菩薩の所見が報身である。此等の三身は色心不二・色智不二の故に相即圓融なるものである。即ち客觀的眞理としての覺體が法身、主觀的眞理としての覺相が報身、分別的假象としての覺用が應身である。

此の外、如如如智を體とし一切智に依止し、生死の因果を滅し恒沙の如き圓滿なる功德を具し、法身と自受用身とを兼攝するものとして自性身を立て、登地已上の菩薩の感する無量の淨土に顯現し利他を行ずる他受用身として受用身を立て、大定智慧を體とし天人中に示現するものとして變化身を立てる攝大乘論(來九六十一)の所説がある。是れと同様なる所説として佛地經論(卷十一・四十二)があるが略する。更に如來の相好精妙殊勝にして不變、無等齊、無類、無言慮の三徳を具へ、世人見るべからず十地菩薩の觀るものとして妙色身を立て、常住無盡なる自受用身として智慧身を立て、眞如の普遍智を法身なりとする勝鬘經(地十二・五四右)の説がある。此等は何れも眞佛を開いて二身とし、之と應身とを合して三身を説く故に開真合應の三身説といはれる。

(2)法・應・化の三身説。金光明最勝王經(黃九五)と十八空論(卷二・五十三)の所説が夫れである。前者に依れば、如來修行中に衆生救濟の大願を起し十度・斷障を修習因滿ち因果を得て壽命・心・衆具・業・勝解・願・力・智・法の十自在を得、時に應じ現身説法し衆生を益する是れ即ち化身にして三乘

人の所見とする。又菩薩をして根本智を起さしめ、眞俗に通達せしむる爲に先づ眞諦境を説き、我見と生死恐怖と涅槃歡喜の心を除き法を久住ならしむる爲に二空の眞性（如々）と夫れに達する智（如々智）とを持し、本願力に由つて三十二相・八十種好・頂背圓光を莊嚴し示現する是れ即ち應身にして地上菩薩の所見とする。更に如如は即ち自性法身、法身これ自性眞如であり、法身は自律的にして眞實有、法身に依據してのみ在り得る應身・化身は他律的にして唯名的假有であるとし、三身を説き學者の生死解脱を勧めてゐる。

後者に依れば、法・應身を依據として下種の衆生を利するを化身とし、成熟の衆生を利するを應身とし、衆生盡きざる故に應・化の用亦盡きず、故に其の體たる法身は常住湛然なるものであるとし、「以用終體」といひ、煩惱惑を滅すべき智慧の源泉たる涅槃の本體として法身の存すべきことを信じ、法・應身は本末の關係にあり本は末に依據せずして成立し得るも末は本に依據せざれば不可成立なる如く、法身は應身に據らずして成立し、應身は法身に據らずんば不可成立なりとし、法身を以て應・化身を基礎づけてゐる。斯かる要請的證明は理體的法身の熱烈なる信仰を反證するものと思はれる。

(3) 三法身説。金剛般若波羅蜜經論(往六十二)に言説法身、智相至得法身、福相至得法身が説かれてある。佛滅後第五の五百歳たる鬪諍堅固の時代に於て持戒修德怠らず、無量の諸佛處に於て諸善

根を種ゆる者の所見が言說法身である。次に一切聖賢の見る無分別なる無爲法を自覺し無上正覺を啓發する般若の智其者を智相至得法身と名づけしものと思はれる。更に此經中の四句偈等を信力と念力とを以て受持する者の功德に依つて得る法身を福相至得法身といふ。後二法身は共に言說法身を基とするものと思はれる。言說法身は實相の法身、智相至得法身は義相の法身、福相至得法身は説相の法身なりともいはれると思ふ。

六一佛四身説

四身説の一般的なるものは三身中の受用身を自他の二身に分立せるものにして、成唯識論(往十・四七)佛地經論(暑十一・四四)に説かれてあるが此處には略す。開真合應の四身説として楞伽經(黃六・二一三)には化佛・報佛・如如佛・智慧佛が説かれてある。即ち機に隨ひ感に赴くを化佛といひ、其の宿因に酬ふるを報佛といひ、體性無二なるを如如(眞如)といひ、本覺顯照を智慧といふ。化佛は應身、報佛・智慧佛は報身、如如佛は法身である。即ち報身の數多き功德を福智の二に歸納し二身を立て、之に法身(如如佛)と應身(化佛)とを加へたるものが楞伽經所説の四身説である。次に開應合眞の四身説として金光明最勝王經(黃九・六)には化身非應身・應身非化身・化身亦應身・非化身非應身が説かれてある。即ち無上果を證得することに依つて八相中の涅槃相を現じ、願自在に依つて大悲願自在力

を得、機根の感縁に隨つて或は影像を留め或は類身を餘し佛形を作さず、不定の形を現はして衆生を利益するものが化身である。次に應身は地前四善根位の菩薩の所見にして佛形を作して地前に逗まるものをいひ、化身の如く餘形を作さず必ず佛形を作す故に非化身といはれる。次に化身にして且つ應身なるものは二乘所見の身にして人天の類を作す故に化身といはれ、正覺を成ずる故に亦應身といはれ、王宮身に於て成佛を現する故に有餘涅槃に住する身にして、即ち七地に至つて分段身を受くる菩薩の見る他受用身が此の化身亦應身に外ならない。更に非化身非應身とは即ち法身にして自受用身と自性法身とを合したるものである。此法身の體たる法如如は人我・法我の二相を遠離し有無の四句・二異の四を離れ、數量的分別を越えたる無分別境であり、染を離れて始めて淨なるに非ず、染に在つて而も染ならざるものである。斯かる如如より導き出されたる如如智は如如の特性を具ふること勿論にして、圓修道滿なる無分別智である。故に法身は境智俱に清淨にして不可分別であり、彼此の中間に差別なき故に法身と名づけたのである。境清淨の故に滅諦を本とし智清淨の故に道諦を本とする。之を依所とする應化身は此法身に依つて始めて災患救濟、惡趣救濟、非方便救濟、薩迦耶救濟、二乘救濟の如き事業を顯現し得るのである。

斯の如く四身説は要するに三身説の延長に過ぎぬ。此の外に五身説(五分法身説)を説くものに大乘義章卷十九(續藏經第二編第二套第三冊二百二十)あり一佛十身説としては勝天王般若波羅蜜經(月八・六十六

左)、佛地經論(卷十一・四十四)、十地經論(卷九・五十)、華嚴經(天九・二右)等があるが省略する。

本論下 禪宗より見たる佛身觀

以上略述せる教内より見たる佛身觀は何れも法身常住の思想を中心とし、客觀的眞理としての理體佛に基き種々作用身の存在を要請せるものである。従つて其所説は未だ佛陀即自己の體驗佛に徹せざるの思ひがある。以下に禪宗より見たる佛身觀——內在的佛身觀——を略述しやう。

一 六祖以前の佛身觀

(一)初祖達磨の佛身觀。達磨大師血脈論(續藏經第一輯第二編第十五套第五册)を見るに

「一切時中一切處所、皆是汝本心。皆是汝本佛。卽心是佛亦復如是。除此心外。終無別佛可得。離此心外。覓菩提涅槃。無有是處。自性眞實。非因非果法。卽是心義。自心是涅槃。若言心外有佛及菩提可得。無有是處。佛及菩提皆在何處。譬如有人以手提虚空得否。虚空但有名。亦無相貌。取不得捨不得。是捉空不得。除此心外見佛。終不得也。佛是自心作得。因何離此心外覓佛。前佛後佛只言其心。心卽是佛。佛卽是心。心外無佛。佛外無心。若言心外有佛。佛在何處。心外既無佛。何起佛見。遞信誑惑。不能了本心。被它無情物。攝無自由。若也不信。自誑無益。佛無過患。衆生顛

倒。不覺不知自心是佛。若知自心是佛。不應心外覓佛。佛不度佛。將心覓佛。不識佛但是外。覓佛者盡是不識自心是佛。亦不得將佛禮佛。不得將心念佛。佛不誦經。佛不持戒。佛不犯戒。佛無持犯。亦不造善惡。若欲覓佛。須是見性。見性即是佛。若不見性。念佛誦經。持齋持戒亦無益處。念佛得因果。誦經得聰明。持戒得生天。布施得福報。覓佛終不得也。……若要覓佛。直須見性。性即是佛。佛即是自在人。無事無作人。」(四百五)

とあり、即心是佛、見性即是佛を説き、無事無作の自在心を佛と見てゐる。更に

「即此身是汝本法身。即此法身是汝本心。……法身常住。無所住。如來法身常不變異。」(四百六)

とあり、絶對普遍的自在心を法身なりとし、同時に身即法身なりとも説かれてゐる。更に三身を説いては其の悟性論に

「佛有三身者。化身報身法身。化身亦云應身。若衆生常作善時即化身。現脩智慧時即法身。現覺無爲即法身。常現飛騰十方隨宜救濟者。化身佛也。若斷惑即是雪山成道。報身佛也。無言無說無作無得湛然常住。法身佛也。若論至理。一佛尙無。何得有三。此謂三身者。但據人智也。人有上中下説。下智之人妄興福力也。妄見化身佛。中智之人妄斷煩惱。妄見報身佛。上智之人妄證菩提。妄見法身佛。上上智之人內照圓寂。明心即佛。不待心而得佛智。知三身與萬法。皆不可取不可説。此即解脫心。成於大道。」(四百七)

とあり、元來三身は取るべからず説くべからず三身の得べきものなし、但其の機根に随つて三身を妄見する。善を作す時其の儘に化身であり、智慧を脩する時其儘に報身であり、無爲を覺る時其儘に法身である。而して心即佛の解脫心を得る者が眞の佛を見る者であるとなしてゐる。

(2) 二祖慧可の佛身觀。慧可も亦即心即佛、即身即佛、生佛不二を説く。即身成佛、生佛不二を説いては

「觀身與佛不差別何須更覓彼無餘」(藥藏・景德傳灯錄卷三十七左)

といひ、即心即佛を説いては

「是心是佛是心是法法佛無二僧寶亦然」(同十五右)

とある。此語は三祖僧璨に示したるものなれば、三祖の佛身觀も殆ど之に等しきものと思ふ。

(3) 四祖道信の佛身觀。景德傳燈錄(卷四・七左)に依れば

「夫百千法門同歸方寸河沙妙德總在心源一切戒門定門慧門神通變化悉自具足不離汝心一切煩惱業障本來空寂一切因果皆如夢幻無三界可出無菩提可求人與非人一性相平等大道虛曠絕思絕慮如是之法汝今已得更無闕少與佛何殊更無別法汝但任心自在莫作觀行亦莫澄心莫起貪瞋莫懷愁慮蕩蕩無礙任意縱橫不作諸善不作諸惡行住坐臥觸目遇緣總是佛之妙用快樂無憂故名爲佛」とあり、思慮を絶したる自在心即佛なりとしてゐる。

(4)五祖弘忍の佛身觀。五祖弘忍は「了然守本真心是第一道」「不失正念」を高唱し心即佛を説く。其の著「寂上乘論」(續藏經第一輯第二)編第十五套第五册)を見るに

「夫修道之本體須識當身本來清淨不生不滅無有分別自性圓滿清淨之心此是本師乃勝念十方諸佛」
……若識心者守之則到彼岸迷心者棄之則墮三塗故知三世諸佛以自心爲本師……問曰何名自心勝念彼佛答曰常念彼佛不免生死守我本心則到彼岸金剛經云若以色見我以音聲求我是人行邪道不能見如來故云守本真心勝念佗佛……十方諸佛悟達法性皆自然照燦於心源妄想不生正念不失我所心滅故得不受生死不生不滅故即畢竟寂滅故知萬樂自歸一切衆生迷於真性不識心本種種妄緣不修正念故即憎愛心起以憎愛故則心器破漏心器破漏故即有生死有生死故則諸苦自現心王經云真如佛性沒在知見六識海中沈淪生死不得解脫努力會是守本真心妄念不生我所心滅自然與佛平等無二……三世諸佛皆從心性中生先守真心妄念不生我所心滅後得成佛故知守本真心是三世諸佛之祖也……吾今望得汝自識本心是佛……若能自識本念念念磨鍊莫住者即自見佛性也……若佛能度衆生者過去諸佛恒沙無量何故我等不成佛也只是情誠不自內發是故沈沒苦海努力努力……問曰云何是我所心滅答曰爲有小許勝他之心自念我能如此者是我所心涅槃中病故涅槃經曰譬如虛空能容萬物而此虛空不自念言我能含容如是此喻我所心滅趣金剛三昧(四百十五右四百十六左)とあり、自性の圓滿なる清淨心は三世の諸佛も之を以て本師となす。色音聲を以て佛を見んとする

も不可能、たゞ自心を守る者が佛を見る。自性の眞心が諸佛の根源であり自の本心が是れ佛に外ならぬ。佛が客觀的存在なりとせば何故に普遍的救濟を行はぬか。虚空の能く萬物を含容し而も自ら夫れを意識せざるが如く、他に勝るの心なき者こそ本心是佛の自覺を得るとなしてゐる。

(5)六祖慧能の佛身觀。慧能は卓越せる大匠にして人々具足の般若の本性即佛にして他に何等の佛なきを明かし、六祖壇經に「本性是佛、離性無別佛」(騰四・四左)といひ、更に

「彼既是佛、已具知見、何用更開、汝今當信、佛知見者、只汝自心、更無別佛、蓋爲一切衆生自蔽光明貪愛塵境外緣內擾甘受驅馳、便勞他世尊從三昧起、種種苦口勸令寢息。莫向外救與佛無二。」

(騰四・八左)

といひ、自己本來の心光これ佛の知見にして、對象に縛せられざるもの即ち佛なりとし、凡聖の差はこれ一念の間にあるを説いては

「一念修行自身等佛、善知識、凡夫即佛、煩惱即菩提、前念迷即凡夫、後念悟即佛。」(騰四・四左)
といひ煩惱本無體にして般若の智を見る所に佛を見るとなし、更に

「前念不生即心、後念不滅即佛、成一切相即心、離一切相即佛、吾若具說窮劫不盡、聽吾偈曰、即心名慧、即佛乃定。」(騰四・八右)

といひ虚空の寥廓として一點の雲なきが如く、境に涉り著せざる底の一念即ち心であり、柳に逢ふ

ては緑を看、花に逢ふては紅を看る是れ即ち心である。柳緑花紅に著せざるものが定にして佛であり、能く境を照らすものが心、此の定慧清淨を得るものにして始めて佛を得るとなしてゐる。其の眞佛を説いては

「後代迷人若識衆生、卽是佛性、若不識衆生、萬劫覓佛難逢、吾今教汝、識自心衆生見自心佛性、欲求見佛但識衆生、只爲衆生迷佛、非是佛迷衆生、自性若悟衆生是佛、自性若迷佛是衆生、自性平等衆性是佛、自性邪險佛是衆生、汝等心若險曲、卽佛在衆生中、一念平直、卽是衆生成佛、我心自有佛、自佛是眞佛、自若無佛心、何處求真佛、汝等自心是佛、更莫狐疑、」(騰四・十三左)

とあり自心の衆生たることの清淨なる自覺こそ眞佛自らの自覺であり、衆生の衆生たるを見る眼卽ち眞佛の眼に外ならないと説いてゐる。更に法・色二身説としては

「據汝所説、卽色身外別有法身、離生滅求於寂滅、又推涅槃常樂、言有身受用、斯乃執恠生死耽著世樂、汝今當知、佛爲一切迷人認五蘊和合爲自體相、分別一切法爲外塵相、好生惡死念念遷流、不知夢幻虛假枉受輪廻、以常樂涅槃翻爲苦相終日馳求、佛愍此故乃示涅槃眞樂、刹那無有生相、刹那無有滅相、更無生滅可滅、是則寂滅現前、」(騰四・九左)

とあり色身は變化極まりなき肉體身であり、法身は色身以外に在る無漏法性の理體にして超知覺的實在なりと解する如きは、肉體身卽法身なるを自覺せざる者の大錯誤なりとし、生滅變化の中にこ

そ寂滅常住はあれ、變化を離れては何等の常住もなしとし、色身の中に法身を見るべきを力説されてゐる。又三身佛を説いては、自性の中に之を見るべく他に向つて求むべからずとし、自性中の清淨法身佛・圓滿報身佛・千百億化身佛に對する自歸依を高唱し、其の清淨法身佛を説いては

「何名清淨法身佛、世人性本清淨、萬法從自性生、思量一切惡事卽生惡行、思量一切善事卽生善行如是諸法在自性中、如天常清日月光明、爲浮雲蓋覆上明下暗、忽遇風吹雲散上下俱明萬象皆現、世人性常浮游如彼天雲、善知識、智如日慧如月、智慧常明、於外著境被妄念浮雲蓋覆自性、不得朗朗若遇善知識、聞眞正法、自除迷妄內外明徹、於自性中萬法皆現、見性之人亦復如是、此名清淨法身佛」(騰四・七左)

とあり自性は本來無依にして善惡の萬法悉く自性より生じ、無明の業識に覆はれる故に之を自覺し得ず、誤れる虚妄の生活に陥つてゐる。此の生活を脱したる自性の自覺者こそ清淨法身佛の運載者に外ならぬとなし、其の圓滿報身佛を説いては

「何名圓滿報身、譬如一燈能除千年暗、一智能滅萬年愚、莫思向前已過、不可得常思於後、念念圓明自見本性、善惡雖殊本性無二、無二之姓名爲實性、於實性中不染善惡、此名圓滿報身佛」

(騰四・七左右)

といひ苦惱の鐵鎖に縛されたる過去の生活を追はず、架空の想像に充たされたる未來の生活を夢み

す、唯現在の眞實なる自性に生き一切の善惡に著せざる者こそ圓滿報身佛の體觀者であるとなし、其の千百億化身佛を説いては

「何名千百億化身、若不思萬法、性本如空、一念思量名爲變化、思量惡事化爲地獄、思量善事化爲天堂、毒害化爲龍蛇、慈悲化爲菩薩、智慧化爲上界、愚癡化爲下方、自性變化甚多、迷人不能省覺、念念起惡常行惡道、迴一念善、知慧卽生、此名自性化身佛」(騰四・八右)

といひ思量以前の湛然寂靜なる自性が思量の限定を受けたるを變化と名づけ、種々無量なる思量の姿を千百億化身佛と呼び、自性の三身を悟了すること卽自性の佛を識ることとなりとなし、更に

「師曰、三身者、清淨法身汝之性也、圓滿報身汝之智也、千百億化身汝之行也、若離本性別說三身、卽名有身無智、若悟三身無有自性、卽明四智菩提」(騰四・九右)

といひて三身に個別的自性なく自性、智慧、日用の行爲の假立的異名に過ぎざるを自覺せば大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智を體得するとなしてゐる。更に自性眞佛の偈に

「眞如自性是真佛、邪見三毒是魔王、邪迷之時魔在舍、正見之時佛在堂……法身報身及化身、三身本來是一身……本從化身生淨性、淨性常在化身中、性使化身行正道、當來圓滿眞無窮……」

(騰四・十三左十四右)

といひ三身は同一身にして而も法身を以て生身より生ずとなし、日常行爲に實踐されてこそ法身の

眞價を發揮し得となせる如く、化身を最重要視せる所に禪宗獨特の佛身觀があると思はれる。更に五分法身を説いては

「一戒香、卽自心中無非無惡、無嫉妬無貪瞋無劫害、名戒香、二定香、卽觀諸善惡境相自心不亂、名定香、三慧香、自心無礙、常以智慧觀照自性不造諸惡、雖修衆善心不執着、敬上念下矜恤孤貧、名慧香、四解脫香、卽自心無所攀緣、不思善不思惡、自在無礙、名解脫香、五解脫知見香、自心既無所攀緣善惡、不可沈空守寂、卽須廣學多聞、識自本心達諸佛理、和光接物無我無人、眞至菩提眞性不易、名解脫知見香、善知識、此香各自內薰、莫向外覓」(騰四・七右)

とあり、自性本來清淨にして無爲、戒の持すべきなく又犯すべきなく、善にして惡ならざる佛性を持する卽ち是れ戒身である。諸善惡の境相これ無自性にして不可得なるを了達し、達磨の所謂大乘を深信し心に退轉なき卽ち是れ定身である。無邊際にして遮止なき智慧光を以て無著の善行を修する卽ち是れ慧身である。自由なる自性に住し而も自らの自由を計らず繫縛の名をも憎惡せざる卽ち是れ解脫身である。斯の如き解脫の全境に住し何等の邊見なく、衆生を救利し物に應じ形を現はし、永恆不變なる菩提の眞性に活きるものは是れ卽ち解脫知見身である。五分法身は悉く吾人の脚跟下にあり他に向つて求むべきではないと説かれてある。

二 六祖以後の佛身觀

(1) 青原行思の佛身觀。六祖慧能の第一の法嗣たる青原行思の佛身觀は宗鏡錄第九十七卷に依つて其の概要を視知することが出来る。曰く

「吉州思和尚云、即今語言即是汝心、此心是佛、是實相法身佛、經云、有三阿僧祇百千名號、隨世界應處立名、如隨色摩尼珠、觸青即青、觸黃即黃、實本色、如指不自觸、刀不自割、鏡不自照、隨像所現之處各各不同、得名優劣不同、此心與虛空齊壽、若入三昧門無不是三昧、若入無相門總是無相、隨立之處盡得宗門、語言啼笑屈伸俯仰、各從性海所發故得宗名、相好之佛是因果佛、即實相佛家用、經云、三十二相八十種好、皆從心想生、亦云、法性家焰、又云、法性功勳、隨其心淨即佛土淨、諸念若生隨念得果、應物而現謂之如來、隨應而去故無所求一切時中更無一法可行、自是得法、不以得更得、是以法下知法、法不聞法、平等即佛、佛即平等、不以平等更行平等、故云獨一無伴、迷時迷於悟、悟時悟於迷、迷還自迷、悟還自悟、無有一法不從心生、無有一法不從心滅、是以迷悟總在一心、故云一塵合法界、非心非佛者、眞爲本性過諸數量、非聖非辯、辯所不能言、無佛可作無道可修、經云、若知如來常不說法、是名具足多聞、即見自心具足多聞、故草木有佛性者、皆是一心、飯食作佛事、衣服作佛事」(雲四・七十七右)

摩尼寶珠の青に觸れては青、黄に觸れては黄なるが如く、三昧門に入つては三昧、無相門に入つては無相なる吾人の心性即ち法身佛であり、此心性に基く語言啼笑屈伸俯仰これ凡べて法身佛の顯現である。三十二相・八十種好を具する相好佛は因果佛にして物に應じて生ずる諸念の姿に外ならず、心性の自己限定に依る用たり焰たり功勳たるに過ぎない。是れ即ち如來にして求めなく一法として行すべきものもない。斯かる諸念の生滅は心性の自己限定に外ならざる故に凡べての事象は各自の心性に基き、此の心性の佛を見るものが即ち具足多聞と名づけられる。

(2) 石頭希遷の佛身觀。行思の法嗣たる希遷は肇論に「會萬物爲己者其唯聖人乎」とあるを看儿を拊して曰く

「聖人無己靡所不已法身無象誰云自他圓鑑靈照於其間萬象體玄而自現境智非一孰云去來至哉斯語也」(續藏經乙第十一套第一冊八十一左)

自己意識を越へたる大我これ即法身にして、

「即心即佛心佛衆生菩提煩惱名異體一汝等當知自己心靈體離斷常性非垢淨湛然圓滿凡聖齊同應用無方離心意識三界六道唯自心現水月鏡像豈有生滅汝能知之無所不備」(同)

生佛不二、即心即佛なるものである。

(3) 雪峰義存の佛身觀。徳山宣鑑の法嗣たる義存の佛身觀を見るに、其の語録

(續藏經第一輯第二編第二十四套第五冊)

に次の如く述べられてある。

「即心是佛見性是佛」(四百七十九右)

「師云須是見性方得成佛王云何爲見性師云見自本性無物可見此見難信之法百千諸佛同得」

(四百七十九右)

「問如何是佛師曰寡語作什麼」(四百八十五右)

「問如何是佛師云法林下無天子位」(四百七十五右)

「問如何是諸佛出身處師云自己分事作麼生進云是什麼師云無我且問爾僧無對師云我識得爾」

(四百七十五右)

「問如何是法身師云雖是緣生口不可咬屎橛也」(四百七十五左)

「問如何是諸佛師云莫觸諱進云如何是不觸諱師云解無慚愧」(四百七十三左)

即ち本源の自性を見る所に佛あり、自己分事を覺醒する所に佛ありとなしてゐる。

(4) 南嶽懷讓の佛身觀。慧能の嗣たる懷讓の佛身觀を見るに、馬祖道一禪師語錄(續藏經第一輯第二編第二十四套第五册)

に、

「問曰。大德坐禪圖什麼。師曰。圖作佛。讓乃取一磚。於彼菴前磨。師曰。磨磚作麼。讓曰。磨作

鏡。曰師。磨磚豈得成鏡。讓曰。磨磚既不成鏡。坐禪豈得成佛耶。師曰。如何即是。讓曰。如牛

駕車。車不行。打車卽是。打牛卽是。師無對。讓又曰。汝爲學坐禪。爲學坐佛。若學坐禪。禪非坐臥。若學坐佛。佛非定相。於無住法。不應取捨。汝若坐佛。卽是殺佛。若執坐相。非達其理。」

(四百五左)

とあり、磚を磨して鏡とし、行かざる牛車の車を打つて之を行かしめんとする如く、定相中に佛なく坐佛は却つて殺佛なりとしてゐる。稍々もすれば定中の死物的佛身觀に墮せんとする風を改めて活動的佛身觀を説ける點は注目し値する。

(5)馬祖道一の佛身觀。懷讓の嗣たる道一の佛身觀を見るに其の語録に曰く

「汝等諸人。各信自心是佛。此心卽是佛。……夫求法者。應無所求。心外無別佛。佛外無別心。不取善不捨惡。淨穢兩邊。俱不依怙。達罪性空。念念不可得。無自性故。」(四百五左—四百六右)

「汾州無業禪師參祖。……常聞禪門卽心是佛。實未能了。祖曰。只未了底心卽是。更無別物。」

(四百七左)

「僧問。和尚爲甚麼說卽心卽佛。祖曰。爲止小兒啼。曰啼止時如何。祖曰。非心非佛。」(四百八右)

心外に別佛なく卽心卽佛にして、卽心卽佛と説くも非心非佛と説くも唯是れ攝化の方便であり、在在處處に佛有り、事理雙通の智慧を以て佛なりとし、物に應じ形を現はす智用の無窮なる體卽ち法身なりとなしてゐる。更に其の心を説いては

「平常心是道。何謂平常心。無造作。無是非。無取捨。無斷常。無凡無聖。經云。非凡夫行。非聖賢行。是菩薩行。只如今行住坐臥。應機接物。盡是道。」(四百六左)

とあり行住坐臥に自由なる無分別心を説いてゐる。

(6) 百丈懷海の佛身觀。其の語録(續藏經第一輯第二編 第二十四套第五册) (續藏經第一輯第二編 第二十三套第二册) に依れば

「靈光獨耀。廻脫根塵。體露眞常。不拘文字。心性無染。本自圓成。但離妄緣。卽如如佛。」

(四百九左)

とあり、更に自己卽佛なることを暗示する語としては

「問。如何是佛。師云。汝是阿誰。云某甲。師云。汝識某甲否。云分明箇。師堅起拂子問。汝見拂子否。云見。師乃不語。」(四百十右)

とあり、更に生佛不二を説いては

「祇如今一念一念不被一切有無等法管。自古自今。佛祇是人。人祇是佛。亦是三昧定。不用將定入定。不用將禪想禪。不用將佛覓佛。」(古尊宿語錄卷一・八十五右)

といひ一切事象に律せられざる自律の一念を生活する者は卽ち佛であるとし、

「佛は無著人。無求人。無依人。如今波波貪覓佛。盡皆背也。」(同錄卷二・八十六左)

無著、無求、無依の自由人こそ佛に外ならずと明示されてゐる。其の三身説としては

「三身一體一體三身。一者法身實相佛。法身佛不明不暗。明暗屬幻化。實相由對虛得名。本無一切名目。如云佛身無爲不墮諸數。成佛獻蓋等。是升合擔語。要從濁辯清得名。故云實相法身佛。是名清淨法身毗盧遮那佛。亦名虛空法身佛。亦名大圓鏡智。亦名第八識。立名性宗。亦名空宗。亦名佛居不淨不穢土。亦名在窟師子。亦名金剛後得智。亦名無垢檀。亦名第一義空。亦名玄旨。三祖云。不識玄旨徒勞念靜。二報身佛。菩提樹下佛。亦名幻化佛。亦名相好佛。亦名應身佛。是名圓滿報身盧舍那佛。亦名平等性智。亦名第七識。亦名酬因答果佛。同五十二禪那數。同阿羅漢辟支佛。同一切菩薩等。同受生滅苦等。不同衆生繫業等苦。三化身佛。祇如今於一切有無諸法。都無貪染。亦無無染。離四句外。所有言說辯才。名化身佛。是名千百億化身釋迦牟尼佛。亦名大神變。亦名遊戲神通。亦名妙觀察智。亦名第六識。」(同卷八十八)

とある如く、實相法身佛は普遍智ともいふべきものにして、第八識を轉じて得たる大圓鏡智の作用無礙なる一切種智であり、第一義的玄旨たるものである。報身佛は一切平等・自他平等の大慈悲にして、自我他我の差別執を越へたる第七識・平等性智の境界である。化身佛は一切事象を觀察すること無礙自在にして、言説を似て大衆の疑問を解決し得る妙觀察智の境界である。此等は一體にして三身であり、釋迦牟尼佛の如きは化身佛であるとなしてゐる。懷海は佛の思惟を排斥して

「見佛知佛則得說佛。有知有見却是謗佛。若云佛知佛見佛聞佛說即得。見火即得。火見即不得。如

刀割物即得。物割刀即不得。知佛人見佛人。聞佛人說佛人。如恒河沙。是佛知是佛見。是佛聞是佛說。萬中無一。祇爲自無眼。依他作眼。教中喚作比量智。祇如今貪佛知解。亦是比量智。〔同八十九左〕
といひ「佛とは何ぞや」の問題を思惟に依つて概念的に説明する者は恒沙の如く多いが、自ら佛となつて見、説く底の者は萬人に一人もあらうかと誠められてゐる。

(7) 黃檗希運の佛身觀。懷海の嗣希運の佛身觀は一心卽是佛の一語に盡きる。一心とは見聞覺知の夫れではなく圓明遍照なる自己本源の清淨心である。傳心法要に

「此本源清淨心、常自圓明徧照、世人不悟、祇認見聞覺知爲心、爲見聞覺知所覆、所以不覩精明本體、但直下無心、本體自現、如大日輪昇於虚空徧照十方更無障礙、故道學人唯認見聞覺知施爲動作、空却見聞覺知、卽心路絕無入處、但於見聞覺知處認本心、然本心不屬見聞覺知、亦不離見聞覺知、但莫於見聞覺知上起見解、亦莫於見聞覺知上動念、亦莫離見聞覺知覓心、亦莫捨見聞覺知取法、不卽不離、不住不著、縱橫自在、無非道場」〔騰四・二十四左〕

凡べての相對思量を絶したる一心を通じて生佛は不二である。見聞覺知を捨てたる所直下に一心あり、一心現はるれば見聞覺知これ一心の用となる。一心と見聞覺知との不卽不離なる大用こそ自覺者の生活である。無相にして無爲なる現在の一心、無求にして無著なる現在の一心これ卽ち佛である。

「即心是佛、如今學道人、不悟此心體、便於心上生心、向外求佛、著相修行、皆是惡法、非菩提道、供養十方諸佛、不如供養一個無心道人」(騰四・二十四左)

心體即ち佛なるを悟らず心上更に見聞覺知の心を生じ、對象の中に心體を求むるの愚を敢へてなす、誤れる意味での佛供養よりも寧ろ心體を把握せる無心道人を供養すべしと迄極言されてゐる。三十二相八十種好を評しては

「凡所有相、皆是虛妄、若見諸相非相、即見如來……心既無相、豈得全無三十二相八十種好化度衆生耶、師云、三十二相屬相、凡所有相、皆是虛妄、八十種好屬色、若以色見我、是人行邪道、不能見如來」(騰四・二十七左)

とあり、三十二相八十種好の相色を以て虛妄なりとし、夫れを相に非すと悟り自性一心の中に夫れを見る者のみが如來を見るときなし、更に

「文殊當理、普賢當行、理者真空無礙之理、行者離相無盡之行、觀音當大慈、勢至當大智、維摩者淨名也、淨者性也、名者相也、性相不異、故號淨名、諸大菩薩所表者人皆有之、不離一心、悟之即是」(騰四・二十四左)

とあり文殊の真空無礙の理、普賢の離相無盡の行、觀音の大悲、勢至の大智、維摩の性相不二の境界も悉く人々具足の一心に有りとなし、三身を説いては

「佛有三身、法身說自性虛通法、報身說一切清淨法、化身說六度萬行法、法身說法、不可以言語音聲形相文字而求、無所說、無所證、自性虛通而已、故曰無法可說、是名說法、報身化身皆隨機感現、所說法亦隨事應根以爲攝化、皆非眞法、故曰報化非眞佛、亦非說法者」(騰四・二十五左—二十六右)

とあり、法身は虛通なる自性其者の無言說法を説き、報身は一切の清淨法を説き、化身は六波羅密の行を説く。法身の說法は形聲を以て聞くべからず、虛通なる自性の用其儘にこれ說法であり、隨機應物の報化佛は最早眞の意味での說法者ではなく、自心を識つて平等なるものが佛である。

(8) 南泉普願の佛身觀。古尊宿語錄卷十二(續藏經第一輯第二編第二十三套第二冊)に依れば

「息心達本源。故號如如佛。畢竟無依自在人。」(百四十七左)

とあり、妄心を息め本源心に達したる無依自在の人を如如佛なりとし。

「曰卽心是佛既不得。是心作佛否。師曰。是心是佛是心作佛、情計所有。斯皆想成。佛是智人。心是采集主。皆對物時。他便妙用。大德。莫認心認佛。設認得是境。被他喚作所知愚。」(百四十六左)

卽心是佛に縛せられし者には其の放下を教へ、心是れ佛ならず智是れ道ならず、自ら祖師を覺めよとも教へられてゐる。

「由是見聞覺知卽是報化。所以三十二相異體故。若離彼卽同如來。報化佛總打却。何處存立。不是不許。」(百四十九右)

三十二相・報化佛みなこれ見聞覺知の相にして、相の相に非ざるを悟る者のみ如來に同じと説き
「師問座主。講甚麼經。云彌勒下生經。師云。彌勒幾時下生。云現在天宮未來。師云。天上無彌
勒。地下無彌勒」(百四十六右)

とある如く彌勒これ自性の中にとありとし、

「曰每聞和尚說報化非真佛亦非說法者。未審如何。師曰。緣生故非。曰報化既非真佛。法身是真佛
否。師曰。早是應身也。曰若恁麼即法身亦非真佛。師曰。法身是真非真。老僧無舌不解道。你教我
道即得。曰離三身外何法是真佛。師曰。遮漢共八九十老人相罵向你道了也。更問什麼離不離。擬把
楔釘他虛空。曰伏承華嚴經是法身佛說如何。師曰。爾適來道什麼語。其僧重問。師顧視歎曰。若是
法身說。爾向什麼處聽。曰某甲不會。師曰。大難大難。」(百四十七左)

自說自聽の自性法身を悟らざる者に取つては法身も應身に墮し、自性以外に眞佛を執する者の爲
には眞非眞と教へ、更に道ぶべきことなしと迄歎じられて居る如きは、黃檗希運の佛身觀に等しき
ものがある。又三身即一なるを説いては

「種種生身我説爲量。那箇不可思議。不是意會得底物。如水裏有水即有影。若無水時喚什麼作影。
法身由對報化得名。若無報化。法身向那邊認法身。亦云。是影經論極則頭。只到法身實入理地。
那箇早晚同於經論。經論不管伊如何排遣。他且不到者裏。大難大難。」(百四十九右)

とあり報化の用裡に法身を認むべく、見聞覺知の裡に一心を認むべしと説かれ、教家の法身説を評しては不到者裏大難大難といひ、自性的體驗なくんば可ならざるを教へられてゐる。

(9) 趙州從諗の佛身觀。古尊宿語錄卷十三に

「有俗官問佛在日一切衆生歸依佛。佛滅度後一切衆生歸依什麼處。師云。未有衆生。」(百五十五右)

「問如何是佛如何是衆生。師云。衆生卽是佛。佛卽是衆生。學云。未審兩箇。那箇是衆生。師云問問。」(百五十五左)

「老僧把一枝草。作丈六金身用。把丈六金身。作一枝草用。佛卽是煩惱。煩惱卽是佛。」(同)

「問如何是佛。師云。爾是佛麼。」(百六十右)

とある如く生佛一如、煩惱卽菩提にして、卽心是佛といふも非心非佛といふも唯これ攝化の方便にして、爾是れ佛なりと教へられ、五燈會元卷四(續藏經乙第十) 一套第一冊には

「問如何是佛師曰殿裏底曰殿裏者豈不是泥龕塑像師曰是」(六十六右)

といひて草木國土悉皆成佛の主旨を示し、法身を説いては會元に

「僧曰如何是法身主師便坐僧禮拜師曰且道坐者是立者是」(六十七右)

とあり行住坐臥の色身卽法身なるを示され更に

「問如何是法身。師云應身。云學人不問應身。師云。爾但管應身。」(語錄、百五十七左)

「問三身中那箇是本來身。師云。闕一不可。」(百五十八左)

とあり三身即一にして一體即三身なるを示されてゐる。

三 五家七宗の佛身觀

南嶽門下に臨濟宗・馮仰宗あり、青原下に曹洞宗・雲門宗・法眼宗あり、更に臨濟門下に黃龍・揚岐の二派あり、之を總じて五家七宗といふ。

(1) 臨濟義玄の佛身觀。其の臨濟錄(續藏經第一輯第二編 第二十三套第二册)に釋迦を評するを見るに

「約山僧見處。與釋迦不別。今日多般用處。欠少什麼。二道神光未曾間歇。」

といひ一切衆生もこれ釋迦佛と別人ならず、自己身心即今これ祖佛に同じく

「佛者心清淨光明。透徹法界得名爲佛。」

「爾若達得萬法無生。心如幻化。更無一塵一法。處處清淨是佛。」

「所以佛從無依生。若悟無依。佛亦無得。若如是見得者。是真正見解。」

「佛祖是賞繫底名句。」

萬法無生の端的に達し心幻化の如くにして更に一塵一法の見るべきものなき清淨心即ち佛であり、一物に依倚せず獨脱無伴なる本分の端的即ち佛である。佛祖は賞翫し繫縛する爲の名句に過ぎぬ。

三十二相・八十種好・六神通を説いては、

「佛今何在。明知與我生死不別。彌言三十二相八十種好是佛。轉輪聖王應是如來。明知是幻化。古人云。如來舉身相。爲順世間相。恐人生斷見。權且立虛名。假言三十二八十也。空聲有身非覺體。

無相乃眞形彌道。佛有六通。是不可思議。一切諸天神仙阿修羅大力鬼。亦有神通。應是佛否。道流莫錯。祇如何修羅與天帝釋戰。戰敗領八萬四千眷屬入藕絲孔中藏。莫是聖否。如山僧所舉。皆是業通依通。夫如佛六通者不然。入色界不被色惑。入聲界不被聲惑。入香界不被香惑入味界不被味惑。入觸界不被觸惑。入法界不被法惑。所以達六種色聲香味觸法皆是空相不能繫縛此無依道人。雖是五蘊漏質。便是地行神通。」(百三)

とあり、佛は我が生死の中に在り、三十二相八十種好は人の斷見を生せんことを恐れ世間の情に順じ出現されしものにして如來の幻化身に過ぎざる假名である。斯かる有身は何れも覺體ではない。六神通を有するものが佛であるならば之を有する諸天・阿修羅等も亦佛と云ひ得るか。此等は難行苦行の業果たる業通であり依通である。萬の所作上に依倚したる結果の神通にして本分上から見る時は全くの閑事に過ぎぬ。煩惱を空相なりと違觀し深山幽谷に居り餐霞長生する底の無依の道人こそ眞の地行自在者にして、擧足下足みなこれ神通ならざるなき佛の生活なりとし現實生活の神通を説かれてゐる。其の三身説を見るに三身即一身にして而も本分上の事であり一切衆生の先天的

具有であるとし、外に向ひ求むべからざるを説き

「爾一念心上清淨光。是爾屋裡法身佛。爾一念心上無分別光。是爾屋裡報身佛。爾一念心上無差別光。是爾屋裡化身佛。此三種身。是爾即今目前聽法底人。祇爲不向外馳求。有此功用。據經論家。取三種身爲極則。約山僧見處不然。法三種身是名言。亦是三種依。古人云。身依義立。土據體論。法性身法性土。明知是光影。」(百右)

各人本具の一念心上の清淨なる靈光を悟る所に法身佛あり、妄想分別なき心性の靈光を悟る所に報身佛あり、無差別平等にして法界圓融なる法性の靈光を悟る所に化身佛がある。此等の三身佛は即今目前に説法を聽き得る底の人にして別人ではなく、たゞ自心上に之を悟る者のみが三身の功用に活きる。教者の言に従へば三身を以て極信とするが、實は共に名身句身に過ぎず眞實なるものではなく、物に依據し成立するものにして獨脱なるものではない。法身とか寂光土とかいふのは義理本體より論じたることで、本分上より見る時は何れも光たり影たるに過ぎぬと教へられ、更に「山僧見處。法身即不解説法。」(百二左)とあり、理に落ちるを嫌ひて即今用ふる底のものを根本となす禪宗の立場からは法身は即ち説法を解せざるものとなる。凡そ説法底のことは有相上よりいふことにして、本來無相なる法身の本分より見る時は説法の解すべき何ものもなく、教家の所謂三身の如きは拳を握つて手中に餅ありといひ、黄葉を拈じて錢なりとし以て小兒の啼くを止めんが如しと喝破

されてゐる。斯の如き佛身觀は徹頭徹尾内在的佛身觀にして、禪宗より見たる佛身觀の面目躍如たるものがある。

(2) 馮山靈祐・仰山慧寂の佛身觀。靈祐は南嶽下三世の孫にして嗣慧寂と共に馮仰宗の祖たるものである。語錄(續藏經第一輯第二編第二十四套第五册)に依れば

「今時人。但直下體取不會底。正是汝必。正是汝佛。若向外得一知一解。將爲禪道。且沒交涉。名運糞入。不名運糞出。汗汝心田。所以道不是道。」(四百三十右)

「夫道人之心。質直無僞。無背無面。無詐妄心。一切時中。視聽尋常。更無委曲。亦不閉眼塞耳。但情不附物。卽得。從上諸聖。祇說濁邊遇患。若無如許多惡覺情見想習之事。譬如秋水澄渟。清淨無爲。澹泞無礙。喚他作道人。亦名無事人。」(四百二十六右)

とあり、妄情分別を捨てたる清淨の一心卽是佛にして、外に向つて佛を思惟するも是れ沒交涉なりとし、如如佛を説いては

「以要言之。則實際理地。不受一塵。萬行門中。不捨一法。若也單刀直入。則凡聖情盡。體露眞常。理事不二。卽如如佛。」(同)

とあり清淨にして凡聖なく眞常にして理事不二なる當體卽ち如如佛なりと示され、仰山慧寂は

「我今分明向汝說聖邊事。且莫將心湊泊。但向自己性海。如實而修。不要三昧六通。何以故。此是

聖末邊事。如今且惡識心遠本。但得其本。不愁其末。他時後日。自具去在。若未得本。縱饒將情學他亦不得。汝豈不見。馮山和尚云。凡聖情盡。……卽如如佛。」(四百三十四左)

といひ、自己性海の本源に入れる者には三明六通も不用にして其の儘に如如佛の境界なりとし師靈祐の語を引用し、法身說法を評しては、

「僧問云。法身還解說法也無。師云。我說不得。別有一人說得。云。說得底人。在甚麼處。師推出枕头。」(四百三十五左)

とあり自悟自得の別人あるを示されてゐる。

(3) 洞山良价・曹山本寂の佛身觀。洞山良价は青原下四世の孫にして嗣本寂と共に曹洞宗の祖たるものである。語錄(續藏經第一輯第二編 第二十四套第五冊)に依れば

「師曰苦哉苦哉今時人例皆如此只是認得認得驢前馬後底將爲自己佛法平沈此之是也」(四百五十三左)

「道無心合人人無心合道」(四百五十二右)

「師曰佛之與道俱是名言何不引教初曰教道甚麼師曰得意忘言」(四百五十左)

とあり、自己の本姿を悟らず、佛の眞意を體得せずして其の名言に拘はるを誠しめ、妄心なき自己本性を徹見せよと示され、

「僧問如何是毗盧法身主師曰禾莖粟幹問三身之中阿那身不墮衆數師曰吾常於此切」(四百五十二左)

「師示衆曰五洩先師一日沐浴焚香端坐告衆曰法身圓寂示有去來二千聖同源萬靈歸一吾今遍散胡假興衰無自勞神須存正念」(四百五十四左)

「師辭平和尙平曰其麼處去師曰沿流無定止平曰汝身沿流報身沿流師曰總不作此解」(四百五十左)
 とある如く毗盧法身の禾莖粟幹に迄普遍なるを示し、神を勞するなく正念を存する者が圓寂にして去來ある法身を得べく、又法身報身の同一體なるを示しては總不作此解」と説かれてゐる。本寂は、

「僧問即心即佛即不問如何是非心非佛師曰兔角不用無牛角不用有」(四百六十三左)

「師又問佛眞法身猶若虚空應物現形如水中月作麼生說應底道理德曰如驢觀井師曰道則太殺道只道得八成德曰和尙又如何師曰如井觀驢」(四百六十二左)

「僧問如何是法身主師曰調秦無人僧云這箇莫便是否師曰斬」(四百六十四右)

とある如く、即心即佛といふも非心非佛といふも隨機の方便なりとし、徧きこと虚空の如く物に應じ形を現はすこと水中の月の如き任運自在なる法身を如井觀驢の隔身の句を以て示されてゐる。

(4) 雲門文偃の佛身觀。青原下六世の孫にして雲門宗の祖なる文偃の佛身觀を見るに、古尊宿語

錄卷十五(續藏經第一輯第二編第二十三套第二册)に曰く

「問如何是諸佛出身處。師云。東山水上行。問乞師指箇入路。師云。喫粥喫飯。」(百六十八左)

「問如何是釋迦身。師云。乾屎橛。」(百七十三右)

喫粥喫飯を諸佛出身の處なりとし、乾屎橛を釋迦身なりといへる如きは到底常識を以て解すべからざる所である。

「看看法身變作燈籠。超佛越祖之談從爾脚跟下過也。」(百七十七左)

「師曰。應化之身說。卽是法身說。亦喚作觀體全真。以法身喫法身。又云。飯不是法身。拄杖不是法身。」(百八十一右)

「我尋常道。一切聲是佛聲。一切色是佛色。盡大地是法身。」(百八十一右)

「行住坐臥著衣飯是法身」(百八十六左)

「師一日披袈裟云。我抖擻法身也。總無對。師云。汝問我。僧便問。和尚抖擻法身意旨如何。師云。我也知爾親。」(百八十二右)

「作麼生是法身。師云。六不收。」(百八十左)

「問如何是清淨法身。師云。花藥欄。進云。便與麼會時如何。師云。金毛師子。」(百七十五左)

脚跟下到る處に法身あり、萬物これ法身ならざるはなく、袈裟の中にも法身あり、「やつここな」(六不收)であり、徧一切處の法身を以て雪隱の側の袖垣(花藥欄)なりと答へられ、森羅萬象これ法身の

玄旨を示されてゐる。

(5) 清涼文益の佛身觀。青原下八世の孫にして法眼宗の祖たる文益の佛身觀を見るに其の語録

(續藏經第一輯第二編
第二十四套第五册) に曰く

「問。如何是古佛心。師云。流出慈悲喜捨。」(四百九十八左)

「問。如何是諸佛玄旨。師云。是汝也有。」(同)

「昔有道流。在佛殿前。背佛而坐。僧云。道士莫背佛。道流云。大德本教中道。佛身充滿於法界。

向甚麼處坐得。僧無對。師代云。識得汝。」(五百一左)

「問。如何是古佛。師云。卽今也無嫌疑。」(四百九十八左)

「問。千百億化身。於中如何是清淨法身。師云。總是」(同)

「問。如何是法身。師云。這箇是應身」(四百九十九右)

斯の如く慈悲喜捨の源泉これ佛心、佛身は法界に普遍であり、化身卽法身、法身卽應身にして自心の中に古佛をも見るべしとされてゐる。

(6) 黃龍慧南の佛身觀。南嶽下十一世の孫にして黃龍派の祖たるもの、其の語録(續藏經第一輯第二編
第二十五套第二册) に曰く、

「須依二空理當證法王身。……且道何名法王身。四大五蘊。行住坐臥。開單展鉢。僧堂佛殿。厨庫

三門。無不是法王身。若能於此薦得。乾坤大地。日月星辰。穿過爾諸人眼睛。四大海水。流入爾諸人鼻孔。」(百四右)

人空法空、內空外空、凡空聖空、一切法空を諦觀することに依つて法王身を證得する。森羅萬象悉く法王身ならざるはなく、自己本分より流出する所である。

「身口意清淨。是名佛出世。身口意不淨。是名佛滅度。」(百二左)

「三世諸佛。在鼓聲裡轉大法輪。汝等諸人。向什麼處安身立命。」(九十八左)

身口意の三業その清淨を得たるものが佛の出世であり、三世の諸佛は事々物々の裡に其の法輪を輪じてゐると示されてゐる。

(7) 楊岐方會の佛身觀。同じく南嶽下十一世の孫にして且つ楊岐派の祖たる方會の佛身觀を見るに其の語録(續藏經第一輯第二編 第二十五卷第二册)曰に

「百千諸佛。天下老和尚出世。皆以直指人心。見性成佛。若向者裏明得去。盡與百千諸佛同參。若向者裏。未能明得。楊岐未免惹帶口業。」(百七十左)

「只箇心心是佛。十方世界最靈物。釋迦老子說夢。三世諸佛說夢。天下老和尚說夢。」(二百右)

「過去諸佛。未來諸佛。天下老和尚。總在拄杖頭上。」(百七十二右)

「三世諸佛在爾脚跟下轉大法身。若也會得。功不浪施。若也不會。莫道楊岐山勢峻。前頭更有更高

峰」(二百右)

「上堂。言彌勒真彌勒。分身千百億。時時示時人。時人皆不識。師遂拈起拄杖云。拄杖子。豈不是彌勒。諸人還見麼。拄杖子橫也。是彌勒放光動地。拄杖子豎也。是彌勒放光照曜三十三天。拄杖不橫不豎。彌勒向諸人脚跟下。助爾諸人說般若。」(百七十二左)

「上座僧堂裏展鉢時。與上座同展。睡時與上座同睡。立地時與上座同立地。長者長法身。短者短法身。彌勒運用與去來何處有間隔。」(二百一左)

見性成佛、卽心是佛にして三世諸佛は吾人の脚跟下に在つて法轉を輪する。拄杖もこれ彌勒にして行住坐臥吾人に卽し、根機の長短に順應して何れも夫々法身を體得すべきであるとされてゐる。

結 論

以上に於て、歴史的釋迦より超歴史的佛陀に至り、釋迦をして佛陀たらしめたる正覺を自己現實の裡に活現せしむることに依つて、自己卽佛陀たることを體認する所に禪宗より見たる佛身觀の焦點を認識することか出來たと思ふ。事實上の佛陀釋尊を中心問題とせる小乘的佛身觀より、事實佛と超事實佛との混淆佛を中心とせる大衆部の佛身觀へ、更に法身・生身を立て、法身の實在を信する一佛二身説を生じ、遂には三身・四身等を説く大乘的佛身觀に到れるを見た。面して夫等が理論

に終り要請に止まるならば、即ち理論佛・理想佛たるに過ぎないならば、現實的吾人の生活と共に在り吾人の斷へざる力となることは出来ない。刻々に流れ行く生命に其の座を占め、吾人と共に在る内在的現實佛を提唱するものが、禪宗より見たる佛身觀に外ならない。要之、教内より見たる佛身觀の一般は斯かる内在的現實佛に還元されることに依つて其の現實的價値を發揮し得ると思ふ。

(一九二八・二・一七)